

リュウシィと街の、Hな暮らし。



「リュンシイちゃん。牛乳だよお。」

「はいっ」

朝、牛乳屋さんの呼びかけに応じて私、リュンシイは門に出迎えます。

アッアッアッ...

「えっと、それじゃあ今日も頼めるかな？」

「うん、もちろん！」

一人で暮らす私の為にこの街の人たちは色々と便宜を図ってくれます。牛乳屋さんもその一人です。なので何かお礼をできないかと思って始めたことがあります。

たっぷたっぷ  
たっぷたっぷ  
たっぷたっぷ

「わあっ牛乳屋さんのおちんぽ♡ 今日も  
元気いっぱいだあ♡ 濃いお汁とろとろ  
させて、それに頑張って働いてる人の臭い  
がするう♡」

「す、すまないね。リュシイみたいな女の子に  
朝勃ちちんぽのお世話なんてさせちゃって  
…。」

「うっん。牛乳屋さんはいっつも新鮮な牛乳を分けてくれるから、リユンイもおかえししたいの。それに……。」  
私は牛乳屋さんの突起先にちゅつと吸い付いておちんぽちゃんを吐き出すとろとろをちゅるちゅる吸い取ります。

「うっ……！そ、それ、先走りがすごい勢いで尿道を上って、射精みたいな快感が……」  
牛乳屋さんがおちんぽされてふやけた顔を見せてくれると私もたまらなく嬉しくなってしまうんです。



「ふああ〜…♡とろとろでおクチ  
いっぱあい♡さあさあ、どっぞぞ  
ヌルヌルになったリユシイのおクチで  
牛乳屋さんのお股棒、ぐぽぐぽして  
くださいな♡」

牛乳屋さんにはちよつとためらった  
後にそれでも、おもいつきり良く  
おちんぽを突っ込んできました♡



「くっぽ♡くっぽ♡くっぽ♡くっぽ♡くっぽ♡  
んくっぽ♡」

牛乳屋さんのつるつるで丸い  
おちん先が、リュシィのおクチの中で  
くぽくぽ前後します。

さらにタマタマをぎゅっぎゅして  
あげると、おちんぽ棒がふくうって  
大きくなってクチから抜けなくなって  
しまいました♡

くっぽ

くっぽ

くっぽ

くっぽ

くっぽ

くっぽ





「んっふっうっ……♡んっぽおお……♡  
牛乳屋さん、すつきりできた……  
?♡」

私のおつきなおっぱいで挟み  
込んであげると喜んでもらえる  
事に気が付いて、最後の一滴まで  
お胸とおクチで搾り取ります。

牛乳屋さんがリュシイに満足  
してくれた様で、私も嬉しくなり  
ました。なんだかこの街の一員と  
して認められたような気分です♡

——午前中は畑仕事のお手伝いをして、お昼に教会へ寄ると言ったら、おじさんに荷車で乗せていつて貰えました。ですが……「ひゃっ！」

荷車に積んである飼いの葉の中に魔物が潜んでいたんです！

「お、おじさんっ！何かいますっ！うねうねがリュウシイの服を引っ張って、おっぱいとおまんまん剥き出しにされてますっ！」

ですが荷車の音がうるさいのか、おじさんに声は届きません。



「おじさんっ おじさんっ 気付いてっ  
魔物さんがリュウシイのまんまん  
くぱーって開いて、今にも狙い撃ち  
されそうですっ!」

ですがもちろん、おじさんには  
聞こえません。  
「このままじゃ……街の中でっ、みんな  
に見られちゃうの……っ  
ダメダメっ!」





教会では修道服の幼い少年が出迎えてくれました、エンネって言います。彼は、呪われ、魔物の住処となった教会で一人暮らしています。彼が作る聖水の結界のおかげで魔物達は、基本的には教会から外に出ることなく、敷地内で大人しく暮らしています。

「リュンイツ、来てくれたのっ？」弾んだ声でエンネが駆け寄ってきます。「うんっ。エンネが心配だから。」

私の言葉を聞いた瞬間、エンネの体がビクンって跳ねたのが分かりました。

エンネは呪われた教会で魔物と暮らすうちに魔界の影響を受け、体が徐々に魔界に適応したものになっていました。でもエンネは教会を離れる気は無いみたい。魔物との暮らしが気に入ってるんだって。街の為に頑張っているエンネの事を少しでも助けてあげたい。彼の肥大化する呪いが少しでも楽になるような事を……。

「エンネ、今日も苦しい？いつもの、しよっか。」

エンネの修道服のすそを持ち上げると、中からオトナ顔負けの超巨大ちんぽが顔を出しました。これがエンネが受けている魔界の呪いです。

「リュ……りゅしい……♡」

エンネが情けない顔で懇願してくるのに笑いかけ、私は教会の椅子の上でお尻を突き出しました♡

「っわ、わああ…おつきい…  
エンネのおちんぽ、いつ見ても  
『こんなの入れちゃダメ』って  
気持ちになっちゃやう大きさだね♡」

「入れちゃダメ」と聞いて、エンネは  
露骨に泣きそうな顔になります。  
「大丈夫だよ♡来て♡リュシィの穴で、  
いっっぱいぬきぬきしようねー♡」

「ああああ……っ♡エンネの  
魔物ちんぽっ♡お股に  
すりすりしちやダメっ♡  
リュシィのお股、おちんぽの  
魔力に負けちゃって、敗北  
おもらししちやうう♡♡」

ズリャッ  
ズリャッ

ズリッ

ズリゅ

しゅわぁっ♡♡

私がおしっこしてるのを見て  
エンネはおちんぽを擦る。ペース  
をあげました。  
「リュシィ……っ♡だめえっ♡  
リュシィのおしっここの匂いが僕の  
教会に残り続けると思うだけで  
僕……っ♡♡」  
エンネはもう限界そうでした。  
「エンネ♡リュシィのお股の穴、  
ぜーんぶエンネのちんぽ用だから、  
入れたいときにいつでもグゴグゴ  
していいんだよ♡」

「んおっ♡ほおお……  
おひりに……っ♡エンネの  
魔物ちんぽキタ……っ♡」  
エンネは決まってお尻の穴を  
使います。それが魔界式なのか  
彼の趣味なのかはわかりません。  
魔界仕立てのおちんぽの威力  
は強烈で、私も、挿入したエンネも  
頭が一瞬で爆発して、喉の奥から  
声にならない呻きを発するしか  
できなくなります♡

「ほ……っ♡ほひい……っ♡……っはあ♡」  
「あ……っ♡あうっ♡……あ……あ……♡」



「あ……♡あ……♡っ！ああ……っ♡」  
しばらくお尻穴の入り口で  
先っぽを弄っていたエンネが  
遂に巨大おちんぽを根元まで  
ねじ入れてきました♡さらに  
ちゅっちゅってエンネのちゅっちゅい  
おクチが私の唇を求めてくれます♡  
これは本気射精が始まる合図です♡

おしりまんこを壊しちゃうくらい  
おつきなちんぽの先っぽから、さらに  
おしりをメチャクチャに壊しちゃう  
射精爆発が何度も何度も起こって、  
頭が完全におかしくなっています♡





1時間ほどのあくめタイムが終わり、二人で床に垂れ流されたお汁を雑巾がけしている時は、ちよつと気まづくなってしまうました。

……ただエンネにグ。ポグ。ポ穴を貸してあげようと思ったただけなのに、なんだかもつと良くない方へ流されて行ってしまったような……。

私は頭をぶんぶんして、なんとか違うことを考えました。

「そうだ……。」「こへ来る途中、魔物さんを街でみたよ。」  
うつむいて床を「し」「し」やっていたエンネが顔をあげます。

「ほんとに？……結界が弱ってきているのかも。あの子たちに『おとなしくしてて』って言うても無駄だし……。でも今、聖水の材料を切らして……。」「それなら私がとつてくる！」

Hに溺れて気が沈んでいた二人の顔に、ようやく元気が戻ってきました。  
「……わかった。リュシイ、お願い。気を付けてね。」

エンネが微笑みました。

\*


聖水の材料『霊樹の樹液』は、街外れの森の奥深くにあります。

妖精の気配に満ちたその森の空気を不気味がり、街の人々はおろか、動物たちでさえ滅多に近づきません。なので意外と危険はなく、

前は遊び場所にしていたりしました。けれど、今は精霊の樹に近づく程に緊張してきてしまいます。おそろしく今日も……。

「んひゅっ♡……や、やっぱり今日も  
キタああ……っ♡♡」  
霊樹の側に近づいた時、不意打ちで  
私のおしり穴が串刺しにされちゃい  
ました♡  
（霊液を求める者、代償を差し出し  
なさい。）  
私の頭の中に霊樹の声が響きます。

霊樹の根っこにおしりまんこをぐり  
ぐりされると体の奥からすべてが  
噴き出してしまい、そうになります♡



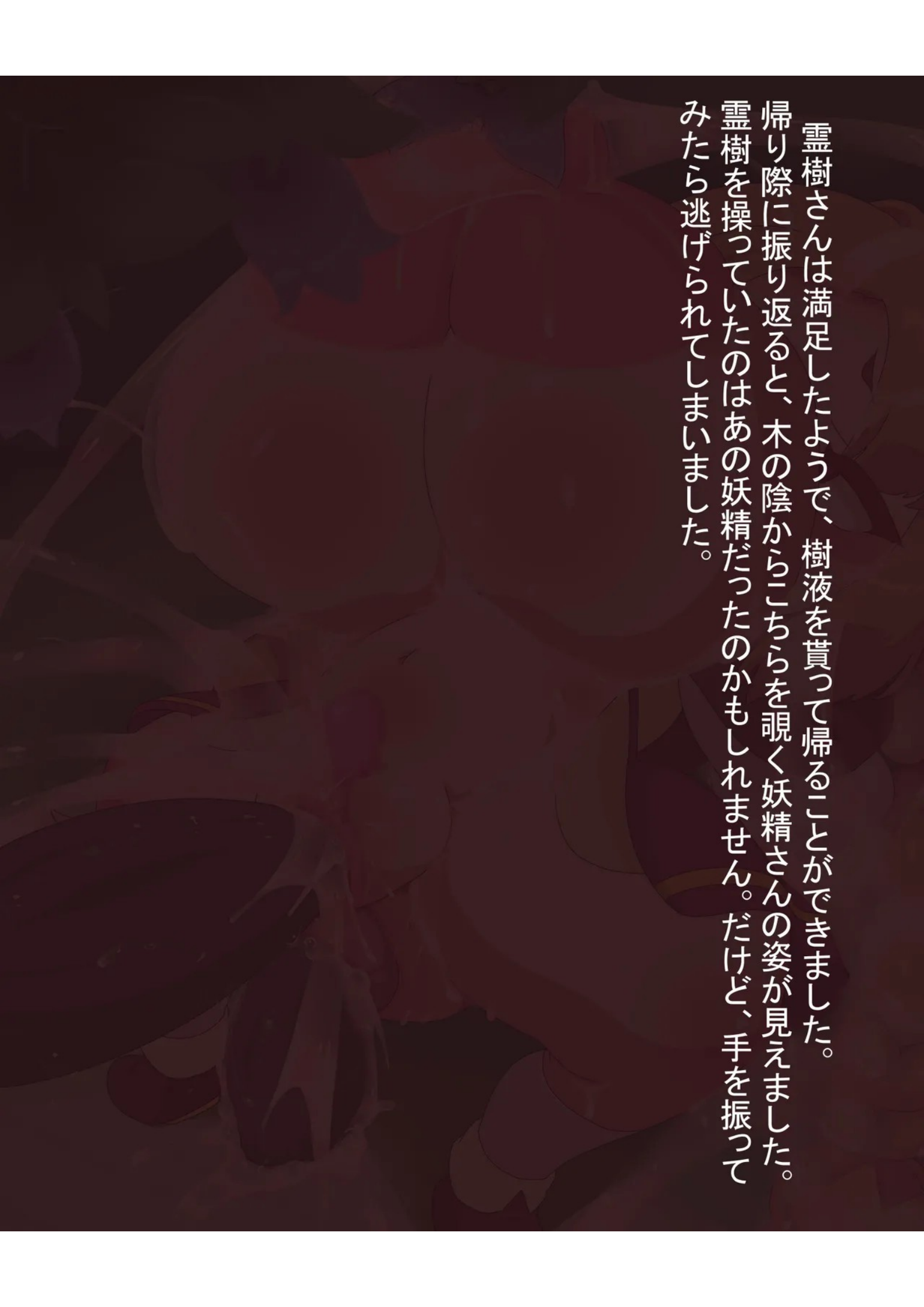
「おまんまんもっ♡二本串刺し  
されちゃったああ♡♡♡」  
靈樹の求める代償とは私のHな  
お汁です。前に靈液を取りに来た  
時にも靈樹に犯され、彼女の養分  
奴隷となることを誓わされて  
しまいました♡  
(私にすべてを差し出しなさい。  
そうすればあなたの望むものも  
さずけましょう。)

二本の根っこから力が流れ込んで  
くるのを感じました。これは私の  
体が全部靈樹に操られる合図  
です♡



Magomeno's

「はひゅ♡んほおおおおつ♡  
全部う♡リュシイのお汁全部  
出ちやいまひゅうううう♡♡」  
霊樹の魔力にかかり、大量に  
噴き出された私のイキ汁を  
地面がおいしそうにごくごく  
飲み込んでいるのがわかります。



霊樹さんは満足したようで、樹液を貰って帰ることができました。帰り際に振り返ると、木の陰からこちらを覗く妖精さんの姿が見えました。霊樹を操っていたのはあの妖精だったのかもしれない。だけど、手を振って見たら逃げられてしまいました。

——帰り道、小さな洞窟から聞こえるうめき声を辿ってみると、奥でボロボロの男の人が壁にもたれていました。男の人は悪い盗賊さんで、失敗をして命からがら逃げ出してきたそうです。その人は私に気付くと言いました。

「へへ…、遂には雌ガキの幻覚まで見えてきやがった…。まあいいや、冥土の土産だ。おいガキ…こっちに来て俺様の相手をしやがれ。」男の人は近づいた私の服をひっぺがすと、私のおまんまんにおちんぽを擦り付けだしました。



「えっ いやあっ だめだよおっ♥ 悪いおじさんに貸してあげるおまんまんはないんだもんっ♥」言いながらも私のからだは気持ちよくなつてきちやいますきつと霊樹に犯された影響がまだ残ってるんだと思います♥

「うああっ イクツ お前もマンコイけっ!」

悪いおじさんが大量の精液を浴びせかけてきます♥それに合わせて…

「えっ♥ あっ♥ うわっ♥ おしりカクカクなるっ♥ い、イク♥ イクっ♥」

さんざんHな事してきた私の体はこうなったらもう逆らえないって分かつちやいました♥



「くおっ何だこのマンゴッ！ザーマン止まらねえっ！くうっやっぱり死ぬ間際の  
幻覚に違いねえ……っこんなマンゴ持ったガキがいきなり目の前に現れるわきや  
ねえからな……っ！」  
おじさんは私の事を幻だと思ったまま、私のおまんまんにとびゅとびゅ  
中出しをし続けます♡

「あうっ♡くうんっ♡ねえっ♡おじさんっ♡リュジイは幻なんかじゃないよっ？  
おじさんがぱんぱんどびゅとびゅやってるの、リュジイのホンモノまんこ  
なんだよっ♡まんまん貸してあげるからっ♡だからいないって思うのやめて  
よおっ♡♡♡」



「クソッどうせ最後だ、構いやしねえ！幻覚だろうが何だろうが孕ませてやる！  
オラァ！孕めっ！孕めえっ！死ぬ間に俺様のガキ、仕込んでやるっ！」

「んおっ♡ほおおおおっ♡♡おじさんの死に物狂いの本気精子っ♡♡  
幻覚嘘おまんこだと思われてるのに孕まされちゃうよおっ♡♡♡」



街に帰り、エンネに霊樹の樹液を渡す頃にはすっかり暗くなっていました。このまま帰ってもいいんですが、なんだか今日は体も火照って眠れそうにありませんし、この時間でもまだやれることがあります。

酒場の戸をくぐると街の大人たちが集まっていました。皆思い思いにお酒を飲んだりお話したりしていました。

「おや、リュシイちゃん。今日はどうだい？」

お酒に酔ったお兄さんの一人が聞いてきました。

「うん。今日はみんなと『お話し会』したいな。」

「よしかったっ」

すぐに何人かがテーブルを整理して、私を持ち上げてくれました。

「聞いてくれよ、リュシイちゃん。  
今日さあ……」

言いながらお兄さんがおちんぽを  
私のおまんこに突っ込んで来ました。

「羊が一匹逃げ出して——」。

「隣のばーさんから煮物をいっぱい——」。

「——の車輪が外れちまって……」。

みんなそれぞれ思い思いに今日のお話を  
語りながらリュシイでぐぼぐぼします♡



「クソッ今日はツイてなかったぜっ」  
「今日も楽しい一日だったよ!」  
皆話の盛り上がりに合わせて腰の動きを速めていきます。私は皆のお話に相槌を打つようにおクチをすぼめたりおっぱいを揺らしたりして応えます。

「今日は——」

皆、各々のお話のピークに合わせて  
どんどん射精していきます。

「んっっ♥もきゅ♥んんんっっ♥」

私は誰かが射精するたびにトンでしまうので  
だんだん頭が回らなくなってしまいます。





「ふっふっ♡ふっふっ♡うっふっ♡んふっ♡んんう♡」  
皆のお酒も回ってきて私の反応も鈍く  
なるにしたがって『お話』のていは関係  
無くなります♡

皆ハイペースで私の全身おまんこで  
ぐぼぐぼしてどぴゅどぴゅってしたら  
交代して、またぐぼぐぼどぴゅどぴゅ  
です♡そうやって夜更けまでずっと  
皆の精液漬けになるまでおまんこしました♡

家に帰ったら一人きりですが、でも寂しくありません。

街の皆のお話とざーめんをいっぱい体に沁み込ませましたし、私が寂しくならないように、おなにーの仕方を教えてくれた人もいました♡

ーこの街は毎日色んなことが起こります。明日の事を考えるとお股がじゅんって熱くなってきたやいます♡

奥付

タイトル:リュシィと街の、Hな暮らし。

作者:handa

サークル:Fの部屋

メール:fnoheyakara@gmail.com



















































